



# 住民の窓

〔敬称略〕

## 赤ちゃん誕生おめでとうございます

氏名	性別	生年月日	父・母	行政区
佐藤 凜音	女	H 30. 5. 26	晃規・さおり	しらかほ区
宮脇 瑛斗	男	H 30. 5. 26	康平・真優	旭町区
大橋 風梨	男	H 30. 6. 12	友彦・真歩	29区

## ご結婚おめでとうございます

氏名	住所
東郷 将成	10区
根本 百合奈	北広島市

## おくやみ申し上げます

氏名	性別	年齢	死亡年月日	喪主	行政区
澤田 武光	男	86	H 30. 5. 17	文子	9区
源内 フサ子	女	93	H 30. 5. 21	稔	栄町区
伊藤 典造	男	89	H 30. 5. 22	たみ彖	栄町区
番場 稔	男	83	H 30. 5. 23	浩	西町区
山田 ミヨ	女	99	H 30. 5. 29	十一	26区
早坂 平助	男	86	H 30. 6. 3	富美子	8区
山下 政明	男	75	H 30. 6. 6	ヨシ子	9区
健名 正信	男	93	H 30. 6. 8	ソメ	1区
折口 義雄	男	91	H 30. 6. 10	ウメノ	2区
田畑 トミエ	女	94	H 30. 6. 11	春久	12区
吉田 秀明	男	77	H 30. 6. 12	孝子	宮下区

## ご寄附ありがとうございます

### ■社会福祉協議会へ 《香典返しにかえて》

氏名	行政区	ご寄附の内容
中村 ひとみ	宮下区	夫（豊）の死去に際して
大澤 正晴	8区	母（ナツイ）の死去に際して
源内 稔	栄町区	母（フサ子）の死去に際して
山下 ヨシ子	9区	夫（政明）の死去に際して
健名 ソメ	1区	夫（正信）の死去に際して

\* 個人情報の適切な取扱いのため、承諾を得た方のみ掲載しています。（6月15日受付分まで）

### ■長沼町へ

#### 《ふるさと長沼応援寄附》

▼申込み件数……241件 ▼寄附金額……3,230,000円（5月1日～5月31日受付分）

※氏名など詳細については、後日町ホームページに掲載することを予定しています。

## 交通安全

5月中に本町で発生した交通事故件数は次のとおりです。

**事故件数 24件（人身事故 2件）**  
**死者 0人 傷者 2人**

（長沼町死亡事故ゼロ記録5月31日現在）  
平成28年2月12日以降840日間

## 税

今月は、固定資産税・都市計画税（第2期）  
国民健康保険料（第1期）  
介護保険料（第1期）  
後期高齢者医療保険料（第1期）  
の納期です！

**納期限 7月31日（火）**

☆納税は便利な口座振替で☆

【納税・相談窓口】  
《夜間納税》

7月26日（木）17時15分～21時



## タンチョウ博士のお話（第15回）

### ○タンチョウに何が起きているのだろう —タンチョウの現状と課題—

タンチョウは、江戸時代に関東地方でも冬には見かけるトリだった。有名な安藤広重も版画に描いたし、殿様の行く鷹狩の獲物や、庶民の密猟の対象にもなり、わりと身近な生きものだった。

ところが、江戸も後期（1820年ころ）になると、湿地の水田開発や狩猟などの影響で、本州ではまれなトリになってしまう。にもかかわらず、北海道では1876（明治9）年に札幌と根室だけで、18羽もタンチョウを捕ったという。ちなみに、この年はクラーク先生で有名な、札幌農学校創立の年である。

しかも、1880年代からは、タンチョウの住みかの石狩平野で、急速に水田開発が行われ、長沼町でも1888年に初めてコメが収穫された。こんな具合に、繁殖地の消失と狩猟で、まもなく北海道でもタンチョウを目にする事はなくなった。

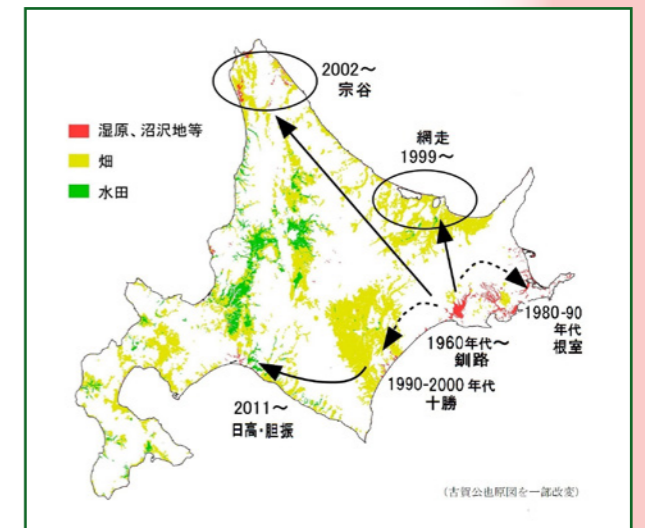
インターネットなどが未発達の時、噂も目撃情報もないので、タンチョウは絶滅したと思う学者がいたのも仕方ない。ところがどっこい、タンチョウは人里離れた道東の湿地で、辛抱強く生き残っていた。その数わずか数十羽で、発見が公にされたのは1926（大正15）年、今から92年前のことだ。

その後、ヒトは保護に力を注ぎ、タンチョウもヒトに慣れ、与えられた餌を食べ、体力をつけて数を急激に増し、今はおよそ1,800羽。なのに、生息地をヒトは畑や水田・工業用地・住宅地などに奪ってしまい、たとえば石狩平野では大正時代と比べ湿地の99.2%が失われたという。

ところで、空のコップでも水を注ぎ続けると、やがてあふれる。あふれた水は、低いところへ流れる。それと同じことが、タンチョウでも起きた。つまり、羽数が増えたため、混み合った道東で住み場を確保しにくくなったタンチョウが、今世紀に入り道北や道央へ進出し始めたのである（図1）。

この現象は、歓迎すべき面も持っている。なぜなら、多いときは300羽以上が狭いひとつの餌場へ集まる道東のタンチョウで、もし感染症、たとえばニワトリで起きる高病原性鳥インフルエンザなどが発生したら、まさにひとたまりもない。その危機を回避する手立てとして、過度の集中を抑え、離れたところに分散した群れをつくるのが急がれているからだ。

しかし、あふれていく先の入れ物の大きさは、さほどあると思えないのが問題だ。また、道東では、冬に餌場に集中するタンチョウを分散させるため、与える餌量を減らし始めたが、果たして望ましい結果になるのか、疑問の声もある。（文：正富宏之）



【図1】各地方において、タンチョウ営巣番いが増えた期間や、新たに出現した年。（例えば、釧路地方では1960年代から増え続けているが、根室地方は1980～90年代に増えたものの、今はほとんど増えていない。）